

「非認知能力育成推進事業」研修会 大村先生からの回答

8月4日に実施した「非認知能力育成推進事業」研修会では、多くの先生方から大村先生への質問をいただきました。その内容を大村先生に送付したところ、大変温かい回答をいただきました。ここで共有させていただきます。

なお、質問の数が多かったため、当センターで精選させていただきました。ご容赦ください。

- 1 学年運営について質問があります。学年全体の非認知能力をつけさせたいときには、学年の先生とつけさせたい力について共有し、場面ごとに行動の価値づけ・意識づけを学年全体にしている方法でよいでしょうか。

→ はい。共通理解をもとにした価値づけ・意識づけは、基本的な方策としてシンプルかつ有効な方法だと思います。気を付けていただく点として、非認知能力はすぐに変容が出るものではありませんので、一年間かけてじっくり育んでいき、少しずつ身についていくという意識を大切にされてください。

- 2 非認知能力育成の土台になる「安心感のある学級」をつくるために、これは絶対外せないという具体策はありますか？

→ 昨年度、滑川市で学級経営についてお話ししたことが基本です。よって、これだけは絶対外せないということの一つにしぼることは難しいですが、あえていうなら、白松（2017）の学級経営の三領域の中の「必然的領域」かと思います。

自分と学級みんなの「心と体を大切にすること」という人権意識の徹底です。心と体を大切にすることは積極的に価値づけるとともに、「相手の心や体を傷つける言動は、どんな理由があっても絶対に許されない」という感覚を教室の隅々まで浸透させることではないでしょうか。そのような教師の毅然とした態度も大切で、気を付けることは指導の一貫性です。どんなに楽しい瞬間でも、どんなにきつい瞬間でも、心と体を大切にしていることはよいこととして大いに称賛し、逆に傷つける言葉や「死ね」などの相手の存在を否定するような言動はどんな時間だろうが雰囲気だろうが冗談であろうが絶対に譲らず一貫した姿勢で指導する。この「一貫性」は重要です。今日は大目に見よう、明日は厳しく、などのムラがないことが大切だと思います。それが子どもの「これだけは絶対に大事な感覚なんだ」という感覚の育成に影響するでしょう。

- 3 子供が自分で課題との向き合い方を選択する授業を何回かやってみたのですが、1人で学習する方法を毎回選ぶ児童が少し心配です。友達との対話を求めている様子で、無理に話をさせるのもためにならないと思います。対話することの重要性を何度も伝えているのですが、1人で課題に取り組みます。先生ならなんて声をかけますか？

→ そういうこと、ありますよね。ただし、ここで大切なことがあります。それは、そもそも、「対話しなくても解決したり成長したりできるような課題であれば、対話しない子が出てくるのは当たり前」ということです。それは否定されることではないように思います。

つまり重要なのは、「友達と対話することが必要であったり、それが自分の考えを広げたり深めたりするような質の課題になっているか」ということです。一人で問題ない課題なのであ

れば、その課題解決についてはむしろ一人でやりたいという子もいるのも自然だと思いますし、それでよいように思います。

逆に、他者との交流でこそ自分の考えが広がったり深まったりするような課題であれば、「他者とかかわる意味」を実感する前提は整います。もし他者とかかわりを大切にしたいのであれば、そのような質の課題で自己決定を促すことが必要ではないでしょうか。そのうえで、その子に、友達の異なるやり方や考えを意図的に先生が紹介してみたり、その子の考えを他の友達が聞こうとしてかかわったりすることを重ねていかれてはいかがでしょうか。そのことで少しずつかかわることの意味や喜びを感じられるようにしていけるといいですね。

その子が友達にかかわるように促すことも大切ですし、周りの友達がその子にかかわるような場面もあるといいですね。「ちょっとずつ」を重ねてください。

- 4 特別支援学級の授業事例は、ありますか？私は特別支援学級の担任をしていますが、自級での学習（国語、算数）は、個別の教材を用意して、取り組ませています。その中で、「粘り強くよく頑張っているね。」の声掛けはよくしていますが、素敵な実践等があれば教えてください。

→ 具体的な紹介まではここではできませんが、書いてくださったような取り組みを重ねていくことはとても大切だと思います。特別支援は、個別支援計画を立てて実践している時点で、その子にあった学びを重ねていこうとする教育の原点ともいえる取り組みを日々されています。それを基本としつつ、「こういうことが素敵なんだよ。あなたは素敵な姿に今なっているよ」ということを認めていくこと、それを重ねていくことこそが、地道なようで最も大切なことではないでしょうか。教師からも友達からも、自分のがんばりがみとめられるような日々をぜひ重ねてください。

- 5 子供たちをみていて、我慢強さがなかったり気持ちが折れ(すぐに諦めてしまう)たりすることが多いように感じます。そのような子供が増えた背景は何だと思いますか？

→ そのように感じることも、ありますよね。一方で、昔から我慢強さのある子もいれば難しい子もいたように思います。つい昔に比べて・・・と思いがちですし、わたしもそうなのですが、冷静に分析すると、確かにそのようなことが難しいお子さんの比率が高くなっているのかもしれないけれど、頑張れる子もいるし、昔もすぐにあきらめてしまう傾向のあるお子さんもいて、そこまで深刻な変容はデータとしては出ないのかもしれないとも思います。

いずれにしても、「このような時代背景や社会背景、家庭環境の変化によってそのようなことがおこっており・・・」みたいなことを知ったとしても、それを嘆くだけでは対応にはならないので、どうすれば粘り強く取り組むことの価値の実感や力がついていくかを考える方が建設的だと感じています。そして、それには時間がかかるので、つついすぐに結果が出がちなことばかりわたしたちは気にしてしまうのだと思います。

例えば、今日は5分であきらめていた子が、1週間後には7分になったとしたらそれは成長なのに、わたしたちはついつい「たったの7分しか・・・」とみてしまいます。わずかな成長であってもそれは成長ですし、そもそも劇的に変わるようなものではありません。大切に積み重ねていくこと。そのためにじっくりかかわり続け、少しの伸びを価値づけ、はげまし、その成果を共に喜ぶことの積み重ねをしていきたいですね。

- 6 児童のやりぬく力が年々下がっているように感じます やりぬく力を身につけさせるには、小さな成功体験を積み重ねるのが大切だと思っていますが、なかなか時間が取れません。児童や生徒に対して、どんな声かけがよいのでしょうか？

→ 難しいですね。ただ、基本的には上記の5でお答えしたことと同じ回答になりますし、やり抜く力をつけることに時間がとれないということはないようにも感じています。なぜなら、毎日の授業のなかでいくらかでもそのような活動はあると思うからです。難しくても考えてみる。作品を完成するまでがんばる。など、日々の授業の中には小さな「やりぬく」があるけど

見えていないことは多々あるように思います。そこに目を向けると、声かけは自然と見えてくるのではないのでしょうか。どのような声かけがよいかに一定・一概の答えはありません。やり抜く課題の質も違えば、子どもの実態も違いますから。それは状況によってさまざまですが、まずは日々の中の小さなやりぬく場面に意識的になり、それをはげまし、ほめ、見守り、ともに喜び・・・を積み重ねていくことではないのでしょうか。

- 7 社会科の実践について大変参考になりました。自分は社会に散在する問題が本当にどうにもならないからこそ社会問題となっていることを理解することに意味があると思っています。つまり意気揚々と自分の主張を話す子供がどこで自分の考え方を見つめ直す場を設けるかに注力します。そのため、「転」にあたる部分に教師がどのようにでるかが重要だと思うのですが、そこで気を付けていることや大切にしていることはありますか？

→ 子どもたちが自分の考えにこだわりをもつことは大切ですが、子どもたちには、世の中に対して狭い視野に固執しないこと、多面的・多角的に問い続けることも大切にしてほしいですね。そのためには、「自分の価値観や視点にそれはなかった」「そんな立場から見ると世の中の違う面が見えてくる」と気付くような資料提示や発問、友達の異なる考えへの注目などが大切だと思っています。

- 8 自己決定による学習をしたとして、自分の学び方に対する振り返りを書かせるときの教師の声掛け（提示の仕方）について教えてほしいです。なんて声をかけたら学び方に対する振り返りを書いてくれますか？自己決定の学習だと、そんな声掛けをせずとも自然と書くものですか？

→ まずはやってみることをおすすめします。やってみると、子どもはどんなことを書くのか、書かないのかを、子どもたち自身が教えてくれるのではないのでしょうか。

とはいえ、大枠の基本があるとするなら、

「①計画や自己決定の内容、方法、またそれによって達成したかったその時間の目標は何だったか（計画や自分の選択・決定したことの確認）

②実際、どうなったか（事実の確認）

③目標は達成できたか、計画通りにできたか、ずれが生じたとすればそれはなぜか（分析）

④そのうえで次はどういうやり方や内容でやっていこうと思うか（分析を生かした次への計画や教訓の生み出し）」

などについて書くように促すでしょう。ただし、1年生と6年生では使う言葉も説明の仕方も異なって当然ですし、どんなことを自己決定して進めていく授業や内容なのかでも言葉は変わってきます。子どもの実態によっても言いぶりは変わってきます。当然、子どもに合わせたアレンジも必要になります。

ですから、末端の方法や言い方のいつでも使える答えのようなものを受け取ろうとするのではなく、自己決定のある授業を構想してご自身で試してみて、それによる子どもの姿から気づくこと、浮かぶこと、言うべきことを見出していくことが教育実践で大切なことだと思います。見出しながら実践して磨いていくことこそが大切なのではないのでしょうか。実践されている人はみな、そうされていて、子どもの姿から学んでいます。

応援しております。